

## Q-Uによる学級経営を通した取り組み —学級生活の満足感を高める学級集団づくり—

### I はじめに

リーダーシップとは、「集団目標達成のために、一人ひとりのメンバーが連帯感を持ちながら、自分の能力や考えを発揮できるようにすること。」とある。

担当する6学年児童らは、常に学校の要、学年・学級のリーダー、グループの長としての役割について、責任をもって遂行し、それに応え努力することが求められてきた。しかし、その多くの児童は、集団の中で相手との関係がこじれたり、自分の思うようにいかなかったりすると問題解決ができず、目標を見失いあきらめてしまいがちである。また、友達関係も表向きは仲が良くても自分を主張せず、相手に合わせてしまったり、逆に折り合いがつかず、自己中心的な考えを押し通す等、人間関係の未熟さも目立ち、自己向上意欲や自己確立意識が低下する傾向にある。全児童を対象に行った「学校生活調査アンケート」からは、不登校児1名、いじめにあっているという児童も3名いることがわかった。

このような実態の中、子どもたちが学校の要としてリーダーシップを発揮し、よりよい自己実現に向けて豊かに成長していくためには、学級集団のよりよい人間関係を築くことが重要だと考え、Q-Uアンケートを活用しての学級づくりを目指した。

### II Q-Uアンケートの分析（実施児童数39名 2009年12月11日）

右図のように、学級生活満足群は全体の56%、非承認群8%、侵害認知群18%、学級生活不満群18%と学級の分布が拡散しているという結果がでた。これまでの担任視線からは見えなかった小グループがいく

〔学級満足度結果〕

つか存在し、ややまとまりがない状態であること、また、グループ間には階層があり、満足群にいる男子グループや侵害行為認知群にいる女子グループが学級の雰囲気を読み替えていることがわかった。要支援群に位置するA君は、学力は高いが孤独を好み、他者との関わりを拒む傾向にある。不満足の強いB君は、攻撃型で自己主張が強い反面、級友には認識されず排除されているという疎外感をもっている。また、不登校児のCさんは、不満度が高く、対人関係がうまくつukれない環境に不安を感じて学級から逃避していることがわかった。その他数名の侵害認知や不満足の児童らの多くは、自分の個性や自己表現をする機会や場が少なく、言葉や態度を通してのコミュニケーションがうまくいっていないという側面があることもわかってきた。学力不振も不安材料の要因になっている事も予想される。

<b>侵害認知群 7人</b> 男 男 女 女 女 女 女	満足群 22人・・・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
女 女 女 男 (B) 不満群 7人 (C)	男 女 男 非承認群 3人
要支援群 (A)	

### Ⅲ 指導の実際

#### (1) 心の通い合う学級，一人ひとりの居場所のある学級を目指して

##### ①ルールやマナーをしっかりと定着させる。

4月から取り組んできたことではあるが，今一度「進んで挨拶」「相手の気持ちを察した言葉づかい」を助言を重ねながら粘り強く指導する。各種活動（朝の活動，地域清掃，行事係，委員会，行事設営等）において，集団活動の場面を多く設定して，子どもたち一人ひとりがかかわり合いを持つための集団生活のマナーを身につける。そして，「けして傷つけてはならない，傷つけられない」ことを徹底して，感情をコントロールできるようにさせる。2週間毎にランダムな席替えを行い，友達との交流範囲を広げて多くのコミュニケーショングループを設ける。B君や侵害認知群の子どもたちへの配慮をこれまで以上に心がける。

##### ②認め・認められる場面を意識する。

自分のよさや存在感を感じさせるために，一人ひとりの良さを見つけて，褒め称える声かけを毎日1回行う。学校生活にかかわる日記や作文を発表し合って，優しさや思いやりの気持ちを伝え合う。「帰りの会」では子供たち同士で，互いの「良いとこスピーチ」の発表の場面を設けて，自分自身に対する自信を持たせる。また，「みんなが笑顔」をスローガンに，ゲームや詩を歌い，手をつなぎ肩をたたき合ってスキンシップを深めあう。地域や家庭からの称賛や励ましの声を掲示する。A君やCさん，非承認群の子どもたちへ配慮する。

#### (2) 共に学び合う総合単元的道徳学習の実践

道徳教育の一番のねらいは，他者との関係づくりを通して，より良い自分を確立し，より良く生きようとすることである。そのためには，全教科・領域等を関連付け意図的・計画的に体験活動を取り入れた総合単元的学習の展開を通して，道徳的価値を仲間と共に追求し，その心情や態度を培う。言語活動の充実を図るために「よく聞き，考えを伝えあう」の意識づけを行いながら心の教育を行う。それが，より良い学級集団や子どもたち一人ひとりの自己の確立につながり，学習意欲の向上，継続する力の向上等，学力向上へと繋がると考える。

### Ⅳ 今後の対応

#### (1) 成果

教師が改めて学級集団の実態を知ることによって，子どもたち一人ひとりに意識的・意図的な手立てや指導が行うことができる。A君は協調性を持ち，班長や学級での仕事を率先して行い，信頼関係を築くことで友達が増えた。B君は，教師が受け入れて認める中で，対話を多く交わし関係を持つことで，少しずつ自分を見つめて非を認識し，相手の立場を考えて行動できるようになった。Cさんは役割を与え，ペアで活動させることで，仲間意識や役割の成就感を持ち，自信に満ちた明るい表情に変わり一日も休まなくなった。「学級への所属意識」がどの子にも必要である。その他数名の侵害認知や不満足の子も，教師がいつもトラブルに対処し，問題解決の手だてを与えることで安心感を持ち，不正や不満に立ち向かう行動が増えてきた。子どもたち同士の連携が高まり，仲間意識が育ってきた。子どもたちにとって，学校生活での生きがいは，友達との良好な関係にあると痛感した。

#### (2) 課題

Q-Uテスト実施を早い時期から行って，経過を観察し，その後2～3回実施できれば，その実体を把握でき，より工夫した対応が可能である。今回は実施取り組みが遅く，学級集団の変容の数値的な実証が難しかった。また，問題解決や欲求を求める役割を教師が中心になり主導的に担ってきたが，その関係を徐々に友達へと移行させて，友人関係の輪を広げていきたい。また，国語・算数の基礎的・基本的な学力を向上させるために，個に応じた指導が不十分であった。学力向上は子どもの学校生活を送る上での大きな自身につながる。計画的な補充指導計画，個別指導計画を立案し，援助指導体制を図る工夫が必要である。